



大田区立龍子記念館版 記念館ノート

第10号

発行：2026年3月31日
編集：大田区立龍子記念館

特別展「川合玉堂と川端龍子」においては、通常は巨大な作品が並ぶ龍子記念館に、穏やかな情景が描かれた玉堂の掛け軸が多数展示されました。(2025年10月撮影)

館のトピックス

◆川端龍子生誕一四〇年特別展

「川合玉堂と川端龍子」を開催しました

昨年、日本画家・川端龍子(一八八五―一九六〇)の生誕一四〇年を迎えました。それを記念して「川端龍子展」が、富山、岩手、島根、愛知と二〇二四年から二五年にかけて、各地を巡回して開催されました。そして、龍子自身が設立した龍子記念館においては、生誕一四〇年特別展「川合玉堂と川端龍子」を開催し(会期：二〇二五年十月十一日～十一月九日)、日本の原風景を描き名匠と称えられた川合玉堂(一八七三―一九五七)と龍子の雅趣あふれる交流を紹介しました。画風では大きな隔りのある二人ですが、戦後、ラジオ番組での対談から親睦を深め、玉堂がこの世を去った際には、葬儀委員長を務めるほどの絆が二人の間には育まれました。

同展では、二〇二四年の開館六十年特別展「横山大観と川端龍子」に引き続き、龍子と日本画壇の巨匠との交流を紹介するもので、玉堂の代名詞とも言える鸚鵡の図と、龍子が大画面に描き上げた《海鶴》(一九六三年、当館蔵)を対照的に配置し、龍子よりも一回り年上の玉堂の修学時代から、最晩年に大観、玉堂、龍子による三巨匠展を仲睦まじく開催するにいたった経緯を、玉堂美術館の所蔵作品を中心に六十点に及ぶ作品、資料からたどる構成にしました。また、戦後八十年にもふれて、玉堂の戦中の制作にも注目し、文化勲章受章年の《彩雨》(一九四〇年、東京国立近代美術館蔵)や太平洋戦争末期の《荒海》(一九四四年、山種美術館蔵)等を展示し、晩年を過ごした青梅に疎開するまでの心境に迫りました。さらに、玉堂を偲んで龍子がしたためた追悼の一句等も展示し、当館ならではの独自性の高い企画を目指しました。

来年は龍子の没後六十年を迎えます。これからも龍子の画業の顕彰に努めるとともに、多角的な視点から展覧会を企画し、近代日本美術を盛り上げてまいります。

2026年度 展示予定

- 名作展Ⅰ「絢爛と健剛 川端龍子の作品における装飾性」
併催：町立湯河原美術館収蔵作品展
会期：2026年3月28日(土)～6月7日(日)
 - 名作展Ⅱ 会期：6月20日(土)～8月23日(日)
 - 高橋龍太郎コレクション連携企画「川端龍子プラスワン」
前期(予定)：9月12日(土)～11月8日(日)
後期(予定)：11月21日(土)～翌1月24日(日)
 - 地域連携企画展「高頭信子展 道一筋(仮称)」
会期：2027年2月11日(木・祝)～3月22日(月・祝)
- ※日程等は変更されることがあります。予めご了承ください。

館の基本情報

《所在地》

大田区立龍子記念館
〒143-0024 東京都大田区中央4-2-1
TEL 03-3772-0680
URL <https://www.ota-bunka.or.jp/ryushi/>

《入館案内》

- 開館時間 午前9時～午後4時30分まで
- 入館料 一般200円、中学生以下100円
※65歳以上(要証明)、未就学児及び障がい者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料
※特別展、企画展の入館料はその都度定める
- 休館日 毎週月曜日(祝日の場合は翌日) 年末年始(12月29日～1月3日) 展示替え等の臨時休館

川端龍子の南方派遣

「日本画壇の巨匠十四人一堂に会す 昭和十七年四月」

大田区立龍子記念館 主任学芸員 木村 拓也

■戦時下の画家たちの南方派遣と新資料

龍子記念館に二〇二四（令和六）年度に寄贈された資料の一つに、「日本画壇の巨匠十四人一堂に会す 昭和十七年四月」（以下、「巨匠十四人一堂に会す」と表記）と題された画帖がある（註1）。その画帖には、一九四二（昭和十七）年に陸軍から南方戦線に派遣された十四名の画家たちのスケッチが寄せられている。画帖内の作家、作品名は【表1】に整理したとおりで、南方の風物がどれも淡彩をほどこされ鮮やかに描かれている。これらのスケッチは、一行の世話役にあたった陸軍将校・上田良作に贈られたものとされ、令和七年度の戦後八十年をテーマとして当館で開催した名作展「時局と画家 川端龍子の一九三〇～四〇年代」（会期：七月十二日～九月二十一日）において紹介したところである。本稿においては、「巨匠十四人一堂に会す」について同展では触れられなかった解説も含め論じていきたい。

一九四二（昭和十七）年五月発行の『日本美術』（創刊号）の「美術人の南方出陣」において、「日本畫壇から、川端龍子、山口蓬春、福田豊四郎、吉岡堅二、洋畫側から、藤田嗣治、寺内萬次郎、清水登之、鶴田吾郎、伊原宇三郎、田村孝之助、中山巍、中村研一、宮本三郎、猪熊弦一郎氏等十四氏を南方共榮圏に派遣し、「四月三、四の兩日、何れも國民服に軍帽も凍々しく、東京驛を出發した」と、陸軍から派遣される画家たちが紹介されている。さらに五月には、海軍からも十六名が派遣されるところとなり、『朝日新聞』において、現地へ「三十名の畫家」が派遣され、陸軍の第一陣として「藤田嗣治、中村研一、宮本三郎、寺内萬次郎、小磯良平、田村孝之助、清水登之、鶴田吾郎、山口蓬春」の九人が四月十一日に、第二陣の「川端龍子、吉岡堅二、福田豊四郎、猪熊弦一郎、中山巍」の五人が十二日

にフランス領インドシナのサイゴン（現ベトナム・ホーチミン）に到着したと報じられている（註2）。このように美術家たちが南方へと派遣された目的は、一九四二（昭和十七）年十二月八日の日本軍によるマレー半島上陸を機とした、太平洋戦争下における南方での侵攻作戦を「作戦記録画」として描くことにあった（註3）。そのため、同年十二月には、朝日新聞社主催で陸軍美術協会に日本美術報国会、大日本海洋美術協会、大日本航空美術協会が協賛に加わり、総出品数三十四点からなる大規模な大東亜戦争美術展（上野・東京府美術館）その後、各地巡回）が開催され、南方へと派遣された画家たちの陸軍作戦記録絵画二十三点、海軍作戦記録絵画十六点が展示されることとなった。

■南方派遣における龍子の指命

この南方派遣から龍子が帰国の途についたのは六月末のこと（註4）。その後、「現地報告」（五十九号、一九四二年八月）において「南方戦線より歸る」と題して伊東深水との対談が組まれている。その中で龍子は、「指命があったのです。指命では私はマレーです。（中略）その範囲内で藤田君はフキテマ、中村君はコタバルの敵前上陸、私はジャングル戦を描くことに決めたのです」と語っている。この発言のとおり、大東亜戦争美術展においては、龍子はジャングル戦を「荊棘に挑む」に表し、藤田は「シンガポール最後の日」「フキ・テマ高地」（東京国立近代美術館・無期限貸与）、中村は「コタバ・バル」（東京国立近代美術館・無期限貸与）といった戦争画においても特に注目される作品を描き上げている。また、「現地報告」の対談のなかで、約三ヶ月の現地での行程について龍子は次のようにも語っている。

伊東（どういった道順で？） ※深水の発言については要約
龍子「四月四日東京を立ちまして、〇〇〇（原文ママ）から一行十四人、四月六日飛行機で〇〇〇から臺北へ飛び、更に廣東へ、廣東から海南島、サイゴン……」

伊東（移動は飛行機を？）
龍子「飛行機です。別便の人と二日違ひで、サイゴンで落合ひましまして、サイゴン滞在中にアンコール・ワットへ行きましてね」（中略）

龍子「サイゴンで、私共一行十四人のうち、皇軍のマレー作戦の跡を通じて戦跡を眺ようと云ふので、清水登之君、福田豊四郎君、私の三人で行くことにしまして、他の諸君はサイゴンから船で昭南（シンガポール）迄行つてしまつたのです」

さらに、龍子と陸路をともにした清水の『南方従軍畫信』（國際情報社出版部、一九四三年）における「行脚日記」には、五月七日にクラ

ルンプールに入り、九日頃に昭南で再び派遣画家たちが顔を合わせたと記述がある。このことから、前述の「巨匠十四人一堂に会す」が描かれたのは、一行が四月にアンコール・ワットを訪問してからサイゴンへ戻った直後に描かれたものと推測できる。画帖を見ていくと、サイゴンが描かれたものが多く、アンコール・ワット等も描かれているため、龍子の語っている行程とも符合する。

龍子記念館にはこの画帖に加え、龍子による現地でのスケッチが一八五点残されている。南方戦線への出発に際して龍子は、日本軍の連戦連勝が伝えられていた時勢もあり、「大東亜戦争は、皇國の興廢をかけての決戦」、「われわれは文化戦士としての全能力を傾倒し、期待にそむたい」と熱を帯びた口調でその決意を表している（註5）。一方で、その後、急激に戦局が悪化して行くことを考えると、これらの資料は、龍子をはじめ戦時下の画家たちが、どのように時代を捉え、作品に展開していたのかを考察するための貴重な資料となると言えよう。引き続き調査を進めながら、龍子の画業と周辺作家についても視野を広げ、その制作姿勢を追究していきたい。

（註1）寄贈者は中澤由希子氏、中澤氏の父・小林延吉氏が上田良作氏より譲り受けたという。
（註2）『従軍十四畫伯西貢着』『朝日新聞』一九四二年四月十三日。ここでは「日本美術」に掲載されたメンバーの伊原に代わって小磯の名前を確認でき、実際には十五人であった。
（註3）日中戦争から太平洋戦争にかけて、戦争を題材としたいわゆる「戦争画」が数多く描かれたが、そのうち、軍からの委嘱によって描かれた記録画を指す。

（註4）「川端龍子畫伯歸る」『朝日新聞』一九四二年七月二日夕刊（註5）川端龍子「南方に使用する」『日本美術』創刊号、一九四二年五月



「日本画壇の巨匠十四人一堂に会す 昭和十七年四月」川端龍子《猿》1942年、大田区立龍子記念館蔵

派遣されるところとなり、『朝日新聞』において、現地へ「三十名の畫家」が派遣され、陸軍の第一陣として「藤田嗣治、中村研一、宮本三郎、寺内萬次郎、小磯良平、田村孝之助、清水登之、鶴田吾郎、山口蓬春」の九人が四月十一日に、第二陣の「川端龍子、吉岡堅二、福田豊四郎、猪熊弦一郎、中山巍」の五人が十二日

作家	作品名
吉岡堅二	「桔梗」
猪熊弦一郎	「安南の女」
中村研一	「サイゴンの船付場」
山口蓬春	「マンゴスチン」
田村孝之介	「マンゴ売りの女」
中山巍	「西貢の新聞売」
清水登之	「アンコールトム所見」
寺内萬次郎	「西貢日本ホテル」
藤田嗣治	「サイゴンのマドモアゼール」
川端龍子	「猿」
宮本三郎	「サイゴンの女」
小磯良平	「娘」
鶴田吾郎	「ライオン」
福田豊四郎	「アンコールへの途次」

【表1】「日本画壇の巨匠 十四人一堂に会す 昭和十七年四月」の作家・作品名（画帖の掲載順）



全国美術館収蔵品サーチ「SHUZŌ」のデータベースはこちらからご覧いただけます。

(註1) 令和二年度に文化庁アートプラットフォーム事業にてデータベースが構築され、令和四年度より国立アトリサーチセンターが事業を継承、運営している。
(註2) 国立アトリサーチセンターの報告より、二〇二五年五月時点。

「SHUZŌ」は、日本全国の美術館・博物館等の施設が所蔵する国内外の近現代美術作品(二八〇一年以降)を収録範囲とし、所蔵館検索のほか、作家名、作品名、制作年、素材・技法などの項目から施設を横断した検索が可能なデータベースです。また日本語に加えて英語表記も併記されており、国内のみならず国際的な情報発信のツールとしても活用されています。昨年度約九万九千ページビューの年間アクセス数があり(註2)、小規模館に属する当館にとっても、広く社会へ所蔵作品の情報を共有できる貴重な場として、所蔵作品の活用促進や作品研究の蓄積が一層期待されます。

今後は、未公開の作品画像や、所蔵作品集に未掲載の作品情報も順次公開を予定しており、外部との連携を強化しながら、当館の所蔵作品の魅力により多くの方にお伝えできるよう努めてまいります。

二〇二五年度

龍子記念館の新たな取り組み

大田区立龍子記念館 学芸員 青木 愛未

インターネット上で所蔵作品を順次公開

大田区立龍子記念館ではこれまで、インターネット上で所蔵作品の情報を公開していなかったことから、独立行政法人国立美術館館国立アトリサーチセンター(OAR)が運営する全国美術館収蔵品サーチ「SHUZŌ」(註1)の協力館として、外部データベース上で作品情報の公開を進めています。令和七年度は作品画像の掲載を充実させ、『大田区立龍子記念館 所蔵作品集 龍子 RYUSHI』(二〇一九年、求龍堂より刊行)に収録された一四五点のうちおよそ一〇〇点を画像付きで検索・閲覧できるようにしました。これにより、鑑賞や研究の幅も広がることでしょう。

対話型プログラム

「おしゃべり鑑賞会」を定期開催

当館では、二〇二五年八月より、対話型プログラム「おしゃべり鑑賞会」を展覧会会期中に月一回のペースで開催しています。二〇二五年度は七回の実施を予定しており、二月時点で五十名以上の方にご参加いただきました。

本プログラムは、大田区社会福祉協議会(以下、社協)の協力のもと、地域連携の取り組みとして社協で活動するアートコミュニティが進行役を務めており、定員は各回十名程度とし、参加者一人ひとりが発言しやすいよう少人数体制で実施しています。「おしゃべり鑑賞会」は、ギャラリートークのような解説を行うものではなく、参加者が作品を見て感じたことや思ったことを自由に語り合う場です。参加者の発言を手がかりに、作品の新たな魅力や特徴を見出していくことを大切にすることで、開始直後は、



感じたことを言葉にすることへの戸惑いから発言が少ない傾向にありますが、時間の経過とともに対話が活発になり、後半には自然と意見が交わされる様子が見られます。参加者からは、「心の中で思っていたことを言葉にして誰かに聞いてもらえることが楽しい」「他の人の意見を聞くことで新たな発見があった」といった声が寄せられ、対話を重ねることで、通常の鑑賞とは異なる気づきが生まれる場となっています。

また、本プログラムを通して、当館が対話型鑑賞に適した施設であることも参加者は実感しています。日本画家・川端龍子が掲げた「会場芸術」の理念のもと制作された大画面の作品の前で、複数人で同じ作品を囲みながら作品にまつわる知識や背景から一度離れ、自身の目で向き合い、その魅力を言葉にしてみる——その体験の輪を今後も広げてまいります。

「おしゃべり鑑賞会」は休館日に開催し、インクルーシブの取り組みとして、介助の必要な方もご参加いただけるよう椅子に座って鑑賞が可能です。
参加費：無料 定員：各回10名程度
お申込み方法：(先着順) 参加日、お名前、電話番号、年齢をお電話かメールアドレス (ryushi@ota-bunka.or.jp) にてお伝えください。
実施日は、チラシや龍子記念館ホームページにて順次お知らせします。

2025～26年にかけての展覧会開催実績

名作展「川端龍子の描き出した世界 生誕140年を迎えて」

併催：谷保玲奈展「け這う」 担当学芸員：木村拓也

会期：2025年3月29日（土）～6月22日（日） 来館者数：4,287人

関連イベント

- ・伝 俵屋宗達《桜芥子図襖》の特別展示（3月29日～4月13日）
- ・谷保玲奈展「け這う」トークセッション（5月18日、会場：旧川端龍子邸・画室）
登壇者：谷保玲奈（出品作家）、岡安賢一（ビデオグラファー）、小金沢智（キュレーター）
- ・地域連携事業「風薫る美術館コンサート」（5月31日、会場：展示室内）
出演：トリトン弦楽四重奏団 企画：大森室内楽愛好会
- ・対話型プログラム（アートリップ）「川端龍子の作品でめぐるアートの旅」（6月17日、会場：展示室内） 協力：一般社団法人 ArtsAlive
- ・ギャラリートーク等



名作展「時局と画家 川端龍子の1930～40年代」

担当学芸員：木村拓也

会期：7月12日（土）～9月21日（日） 来館者数：2,373人

関連イベント

- ・夏休み子ども向けプログラム「観て、描いて、再発見 親子で龍子を味わおう」（8月3日）
講師：小林大悟（美術作家） 企画：らいず工房
- ・地域連携企画事業 講演会「時局と画家 川端龍子の1930～40年代」鑑賞ガイド（8月16日、会場：大田文化の森）
- ・おしゃべり鑑賞会（対話型プログラム）（8月22日、9月8日、会場：展示室内）
協力：社会福祉法人 大田区社会福祉協議会
- ・地域連携企画「夏の夜のミュージアム・ライブ」（8月30日、会場：展示室内）
出演：Jamshid Jams（ジャムシッド・ムラディ（フルート）、下館直樹（ギター）、ニ・テテ・ボーイ（パーカッション）） 企画：ギャラリー南製作所
- ・ギャラリートーク等



川端龍子生誕140年特別展「川合玉堂と川端龍子」

担当学芸員：（主）木村拓也、（副）青木愛未

会期：10月11日（土）～11月9日（日） 来館者数：4,015人

作品・資料 借用館

アーティゾン美術館、青梅信用金庫、北野美術館、玉堂美術館、東京国立近代美術館、パラミタミュージアム、水野美術館、山種美術館（50音順）

関連イベント

- ・地域連携企画事業 講演会「川合玉堂と川端龍子」（10月18日、会場：大田文化の森）
- ・おしゃべり鑑賞会（対話型プログラム）（10月20日、会場：展示室内）
協力：社会福祉法人 大田区社会福祉協議会
- ・「東京文化財ウィーク2025」特別公開事業（10月25日、26日、11月1日～3日）
- ・ギャラリートーク等



名作展「源流へのまなざし モチーフで見る川端龍子」

担当学芸員：青木愛未

会期：12月6日（土）～2026年3月8日（日） 来館者数：3,246人

関連イベント

- ・記念館講座「川端龍子と青龍社の女性画家たち」（2月21日、会場：大田文化の森）
- ・おしゃべり鑑賞会（対話型プログラム）（毎月定期開催を開始、会場：展示室内）
協力：社会福祉法人 大田区社会福祉協議会
- ・ギャラリートーク等

2025年度 龍子記念館 来館者数：13,921人

龍子公園 案内参加者：5,726人

※2025年4月1日から2026年3月8日までの数値

